

物故会員

林 芙美子

はやし ふみこ 小説家 1903.12.31-1951.6.28 福岡県門司市（現・北九州市門司区）に生まれる。（生地は山口県下関市という説もある。）尾道市立高女卒。養父と各地を行商、早くから詩を書いて地方紙に載せられていたが、大正二年（1913）上京、転々と職を替えながら先ず詩集『蒼馬を見たり』を上梓。歌日記を「女人藝術」に連載していたのが『放浪記』として出版され大きな人気を得た。戦時下、ペン部隊として中国や南方に従軍、戦後は客観的写実的な作風を深め独自の成熟を見せたが、人気作家のまま惜しくも早世。掲載作は、昭和二十三年（1948）「新潮」一月号初出の異色の秀作。

夜の蝙蝠傘

この孤独と云ふものは、四方八方から責めたてられて起つたものだと解り、一瞬の考へのなかにも、外部から、何かしら音をたてゝはいりこまれてゐる不安を、始終、頭に入れてゐなければならぬと、追ひまくられてゐる気になり、その息苦しい不安を、英助は、ぢいつと虚空（こくう）に只みつめてゐる。「おい、おくさん、何時（いつ）ごろ、冥土へ御出発としますかね」まるで愉しい旅行へ旅立つやうな尋ねかたである。町子が、鍋の上から顔を挙げた。「まだ迷つてゐるのですか？ 今夜だつて、明日だつてかまひませんよ。——私は早い方がいゝと思つてゐるンですもの……」早い方がいゝと云はれたところで、それではますますにも、お互ひに差し向ひに並んで首をくゝるわけにもゆかない。死ぬには死ぬに就いての人間の最後の身だしなみもいる。「貴方つて、仲々死ぬるひとぢやありませんよ。私は案外さつぱりと逝けるかもしれないけれども、貴方は駄目。いざとなつたら、やつぱり、貴方は死ぬ事の出来ない人ですよ」妻に云はれるまでもなく、英助には、その最期の自信はないのである。一緒に死のうと話しあつてゐる時は、かつかつと頭の中に火が燃えるやうな、凄惨な感傷に血泡沫（ちしぶき）をあげてゐる気でゐながら、いざとなれば、実際、

町子の云ふとほりかもしれないのである。本当を云へば、何も町子を道連れにする事もない。独りで、勝手なところで死ねばいゝのだ。いまのところ、英助の考へてゐる死と云ふものは、空想的で、抽象的でもあるのだ。死の内容が、ひどく軽つぽいもので、死を甘くみつめてゐるところがある。「おい、まだ煮えないのかい?」「まだよ。いま、お醤油を差したところですよ」それでも鍋から柔い湯気があがつてゐる。町子は鍋の中に、箸をさし込んで、輪切りの芋を、口へ持つて行つた。「もう一寸よ」この女はいくつになつてゐるのかなと、英助は、まるで他人のやうな気持で妻の姿を見る。まだ若い。非常に若い。これから、あと、二十年は充分働ける体力を持つてゐる。この若い女に、暗い宿命と云ふものはありやう筈はない。心の中で、なあに、お前を道連れにするものか、俺は独りで死んでみせるよと、英助は、むつくり起きあがつて手巻きの煙草に火をつけた。煙草に火をつけながら、人間に權威がなくなつた場合の、みじめつたらしい卑しさが、自分の指のさきに見えてきて、何もかも無情に引きずられてやりきれなくなつて来る。景色のいゝ温泉にでもつかつて、何も考へないでぐつすりと眠りたい欲望がある。だが、そのやうな眠りにもいまは大変な金がかかるのだ。そのくせ、これ以上の鍛錬を強ひられて生きてゐる甲斐もいまは必要ではない。——英助は、昭和十三年の秋、中国の、揚子江の北岸の広齊と云ふところで負傷して、村の小さい境界にある野戦病院で、右脚を切断してもらつた。そのころは、この戦争を日支事変と云つてゐた。黒いレザーを敷いた大きい卓子の上に、真裸で寝かされたところまでは覚えてゐた。色硝子の天井から、草色の陽が淡く手術台の上に降りかゝつてゐたやうでもあつた。いやにはつきりと、耳の下に虫の音(ね)がしてゐた。窓の外を疲れた兵隊がぞろぞろと移動してゐた。あゝあんな時も自分にはあつたのだと、英助はその日から十年もたつてゐるのに、そのものすごい手術の場面が、折に触れては思ひ出されて来る。柔かい草色のステンドグラスの色が、思ひがけない時に眼の裏にばあつと陽射しをつくる。あの時も、もう、草色の陽を浴びたまゝ命が消えてしまつても仕方がない事だと観念してゐた。その観念の仕方は、いまから思へば、いやいや、まだ自分は生きかへる可能性があるのだと深く信じてゐた。心の片隅の感傷は、機を織るをさのやうな速さで、生命と云ふ炎のまはりを、死んでも仕方がないぞと云ひつゞけてゐた。まるで念仏をとへてゐるやうな必死な願ひでゐた。英助は死なゝかつた。死なゝかつたゞけに、何となくがっかりする度合も深(ふ)かゝつた。不具者となり廢兵になつた行く末の様々な苦勞が、傷口の痛みとともに長い間、今日の此日に到るまで、英助の胸の中に渦を巻いてゐるのである。——町子が皿に芋を盛つて寢床のそばに来た。風の無い凍りついたやうな寒い日である。どんよりとした石油色の空に細い電線が走つてゐた。英助は寝たなりで、窓の電線を眺めながら芋をつまんで頬ばつた。

長い間見馴れた風景でありながら、旅空にでもあるやうな不安な眺めである。その寒々とした空を見てみると、どんな力も必要としないで、このまゝ氷がとけてゆくやうな無気力な消えかたで自分だけを失つてしまひたいやうな気がした。自分が現在生きてみると云ふ触感(てざはり)が何もないのだ。芋の味が耳に響くやうな気がして来るだけだ。そのくせ、この寒さのなかでは、中国の何処かに捨てられたであらう右の脚が、すうつと走つて来て、荒い息をついてゐるやうな爪の痛さをも感じる。脚はちやんとくつゝいてゐるのだが、只、妙なことには、脚の形が見えないのだ。町子も蒲団の横に膝を入れて芋をつまんでゐる。電気コンロには湯が煮えてゐた。アルミの凸凹のやかんの蓋が泡を吹いてゐる。死んで光るものは珊瑚の巢、弟アベルが眼の光。恐らくは花ならむ、海の底の海松(みる)の小枝に、輝く玉あり、輝く玉あり。泡を吹くやかんの蓋の動きのなかに、或る歌をかすかに聴く。英助は汁のついた指をなめながら、「おい、奥さん、こゝへおいでよ。久しぶりに一緒に寝ようではござらんか……」と節をつけて云つた。町子はスカートのホックをぷつんとはめながら、「冗談ばかり云つてるわ……これから、私は忙(せ)はしいんだから、本でも読んで心を静かにしていらつしやい。これから色んなものを買ひこんで来なくちやア……」 万古の久須(きゆうす)に茶を淹れながら、町子はむきだしの膝小僧を短いスカートからよきつと突き出してゐた。「将来(さき)の事は判らん。たつた今の今、新鮮無類など云ふ時を外しては悔いが残るぞよ。お前のやうな美しい女子(をなご)も、障子に写る島影のやうなものぢや、あゝ、茶などはどうでもよろしいと云ふものでおざる。奥さん！ 一寸、こゝへ来てたもれ……」町子は急にやかんを持ちあげると、煮えこぼれる湯を、蒲団のぐるりをまはつて畳にぽとぽとこぼしてまはつた。「あれツ、お前、変な事をしなさんなよツ」もやもやと湯気が蒲団のぐるりに立ちのぼる。町子は空つぽになつたやかんを畳に置くと、げらげら笑ひ出した。小さい耳が赧くなつてゐる。眼は光をまして、額に降りかゝつた髪の毛のすだれ越しに、よく光る笑ひの眼がうるしのやうに染つて見える。「まだ、気違ひになるには早いよ。厭だなア、何ぼ何でも、畳に湯をこぼすおかみさんは見た事がない……」町子は西側の硝子戸を開けた。もうもうとした湯気が、風でさつと壁ぎはになびく。——「ねえ、私達はとも仲がよかつたわねえ？ 十年も一緒にゐて、よくあきもしなかつたわねえ……」英助は眼をつぶつた。「でも、このまゝで死ぬと云ふ事だけは残念よ。私が同情して死んだみたいにとられるのは厭だわ。その上に生活苦だなンて新聞にでも出たらたまらない」英助の耳朶(じだ)に冷いものが流れた。「ねえ、君は、壮吉は好きかい？」町子は久須の茶を茶香茶碗に差してゐた。顔を伏せたなり、「えゝ好きよ、どうして？」と云つた。「うゝん別に何でもないがね、まあ、いゝさ……」町子は英助の枕もとに茶碗を差し出して、「貴方つて云ふひ

とは、何でも未練たつぷりよ。昨夜なんか、さつぱりと悟つたやうな事を云つといて、まだ、くよくよ妙な事を考へてゐるのね」英助は涙をぬぐつた。俺はまだ何かに媚びてゐるのかもしれない。不幸を美味さうに食つてゐる気配が人に見える間はまだ駄目なのかなと、くちやくちやと濡れてゐる耳の穴に指をつゝこんでみる。急にすべてのものに激しい執着がみなぎつて来る。弟アベルが眼の光だ……。町子を弟の壮吉に渡してみたところで面白くもない。自分に死が来ても、この死の真相は誰からも理解はされない。月日がたてば、もくづと消え果てる一つの肉体。戦争さへなかつたならば、自分はおつと違ふ生きかたをしてゐたかもしれないのだ。案外、女房を困らせて、肉親からは爪はじきを受けて暮してゐたかも知れない。自分の身の程を知つてゐる為、皆から愛されて楽な暮し方をしたいと腹黒く媚びて来た十年の長い歳月に、英助は時々胸の芯のなかでひどい怒りかたをしてゐた。戸田英助さんは少しもひがみのない、寛大な心の持ち主で、あのやうな人物はないのだと云はれてゐる事が胸糞の悪い思ひであつた。寛大にしてゐる事が世間では便利な事なのだ。町子さへも、時々、感きはまつて、貴方と云ふひとは、仏様みたいよ。まるで草におく朝露の如き人物だと讃めてくれる。不具者としての欠点がないと云ふ事が、周囲の人間には便利なのだ。英助は、朝々の新聞によつて、戦争裁判のなりゆきをぢいつとみつめてゐる。復しうの氣に満ちた憤りの眼を、自分でよく承知してゐるのである。このまゝで戦争のなごりが消えてゆく事はたまらないのだ。戦争の思ひ出は早く忘れたいと世間は云つてゐるけれども、忘れようたつて忘れる事の出来ない、自分のやうな不具者は、どうしてくれるのだ。いつたいそこまで世に媚びる必要があるのであらうかとも思つてみる。迷惑な立場におかれた自分達のやうな不具者の痛苦を、いつたい誰が知つてゐてくれるのであらうか……。氣が狂ふか、死ぬるかの思ひを耐へて、延々と十年の歳月を暮して来たことに、英助は深い悲しみを持つのであつた。その悲しみは表情には出せないのだ。人が迷惑をするにきまつてゐる。戦争が英助の運命を更へたのだ。勇氣のある兵隊ではなかつたけれども、英助はあの日の手術の時の不運をいつも胸の中に折りたゝんでゐた。忘れられないのだ。安々と拗(す)ねる事の出来ない不満にも腹が立つて来るのだけれども、英助はすべての不運に今日まで耐へしのんだ。松葉杖に金をかける事もしなかつたし、不自然な義足には一度でこりてしまつてゐた。自分は毎日何かを想つてゐる。そして、その何かを心の中で熟してゐる。それでゐながら、透明な諦めを表情に出して、己れをかくして生きてゐる。人生とは英助にとって、只それだけのものであつた。町子がやかんの湯を畳に撒いた。自分のしたい事を、町子が安々とやつてのけた。自分には出来ない。自分がそんな事をしては心をみすかされるのだ。三十七歳の生きながらの隠者は、まづ、何よりも千両役者である事に憂身をやつしてゐる。女房

の収入で生きてゐる事にも甘んじて恩を被らなければならない。働く妻の若々しい元気さに妬みを持つてゐながら、英助はにこやかな笑顔をつくつてゐる。表情をつくる事は面白いのだ。自由自在に頭の芯が命令をするのだ。只生きる為に意志を弄(もてあそ)び、皮膚で風を吸ふ。——深夜になつて独り眼覚めてゐるとき、もうもうと野獣の吠えるやうな唸り声を闇の底に聴く……。妻は安心して、昼の疲れで自分のそばにすやすや眠つてゐる。自分の一本の脚にからみついてゐる女の脚の上に、もう一本の自分の脚がない事は妙な事だつた。形のない脚。見えない脚。だが、その形のない脚にねつとりした汗ばみを感じるのをはかしい事である。形のない脚に力がはいる。その無駄な力をうんうんと引きずりながら、這ふやうにして英助は厠(かはや)に行き、奥の便所に片膝ついた姿になる。深々と淋しさがおそつて来る。厠の高い窓に、星がきらめいてゐる。星を見上げる。その時だけ、英助は心からあゝと溜息をつくのだ。傲然と生きるすべなき人生よ！ この片隅の深夜の溜息は、無数の小人の鬼になつて星へ向つて攻撃して行く。——誰が死ぬものかつ——。俺は生きる。生きたい。どうでもして生きてゐたい……。鼻をつく臭気に向つて英助はかつと唾を吐く。自分を欺いても生きる。人間の真理は何か知らない。だが、死ぬ事を心から念(おも)ふ人間はなかなかゐない。空想はするのだけれども、その、死の真空はとみくじのやうなものだ。いつ当るともしれない真空に、いつもおびえてゐる苦痛は英助にはたまらないのだ。六畳と三畳の古ぼけた小さい家の中だけが、英助の生活の周囲であつた。生涯のうちで、最も重大なこの不幸な記憶を、どうして忘れ去る事が出来るだらう……。不具者となつた自分に、何一つの技巧もなく、只妻や弟にすがつて生きてゐると云ふ事が、英助には耐へられなかつた。漠然と形の見えないものに抵抗をしながらも不自然な生活を続けてゐるといふことに……。いろいろな内職のやうな事もやつてはみたが、手仕事の不器用な英助には大したことも出来ないのだ。考への果ては、自分の頭上に落ちて来た運命感を悪化させるだけである。肉体の基礎を失つたものには、現実には何一つ思はしい職業も与へられはしない。英助は空想のなかで、朝々乗合自動車に乗り、愉快的会社の卓子に腰を降ろしてゐる風景を描いてみる。何となくその一瞬は明るい希望をつなぐ。だがその空想はすぐ現実の煙に追ひまわられて消えて行つてしまふのだ。そして薄暗い渦の底に、自分と同じやうな運命に呻く人間の生活が、この社会の何処かにも、鋏を撒いたやうな存在の仕方淋しく生きてゐるのだと思ふ。何事に対しても、もう、かつての、あの日から、人生に対する陶醉がなくなつてしまつてゐるのだ。

町子が硝子戸を閉めた。「また、何か考へてゐるンでせう？ 考へたつて始まりませんよ。こんな世の中なンだから、もう、さつぱりとした方が勝ちだわ……」英助は何とか遺書を書きたいと思つた。社会から見捨てられた人間とし

て、一言書いて死にたかつた。社会に対しての反抗は、今日の日まで崩れては
ゐなかつたのだと云ふ呪ひの一言を書きおきたかつた。「私、これから、用
事に出掛けますけど、何かほしいものない？」と、町子は汚れたソックスをは
きながら尋ねた。紺色のジヤケツの袖口はほつれ、鼠色のハーフコートも肩は
焼けたやうな色にあせてゐる。そのくせ、顔は活々として、広い額の黒い巻毛
は、町子の顔を派手々々しく見せてゐた。「うん、モウレツにすき焼が食いた
いな……」「あら、すき焼なンてもう駄目よ。ソんなお金出来やしないわ……」
何を売つて来るつもりなのか、町子は暫く次の間で新聞紙の音をさせてゐた。

「ぢやア、一寸出て来ます。すぐ帰りますからね」町子はもう一度英助の枕元
に来ると、柱鏡の前に立つて、髪をときつけた。「あんまり昏くならないうち
に帰れよ」町子は黙つてゐた。出掛ける時に同じことを云はれる事が町子には
心にこたへて来る。自分一人を頼つてゐる良人の、素直な言葉がうつつうしく
さへある。ソックスをとほして、濡れた畳の感触が、町子には、良人(をつと)
と只二人で島に流されてゐるやうな気がした。その孤島のなかでも、良人は町
子に嫉妬を持つてゐるのだ。会社の務めの様子を聞きたがつたり、壮吉の下宿
を尋ねて行くことを厭がつたりする気配を感ずるのだけれども……、そのくせ、
何時も陽気な表情で、英助は町子をからかふ術(すべ)も心得てゐた。——町子
が出て行くと、四囲は急に墓場のやうにひつそりとした。英助は暫く天井を見
てゐた。もう、すぐ、自分は散つてゆく人間なのだ。凄んだ眼つきでこれ以上
は進めないと云ふところまで来てゐるのだ。すぐ散つてゆくと云ふ反射が、頭
を石のやうに重たくする。死と云ふことが怖ろしくなつて来る。空は茄子色に
暮色をおびて来た。無意識に蒲団の襟の匂ひを嗅ぐ。蒲団の匂ひだけが、人間
の脂肪を匂はせてゐる。その匂ひは波立ちさはぐ心は無気力にしてしまふ作用
がある。たとへ脚があつたところで、自分の人生は大した変化はなかつたのか
もしれない……。失つた筈の脚がむずがゆい。主要的な問題が、脚に尽きてゐ
ると云ふ事がふつと馬鹿々々しくさへなつて来るのだ。何も町子を道連れにす
る事もなければ、むきになつて死を考へる必要もないのだ。今日、明日、には
夫婦で、心中をすると云ふ事になつてゐるからこそ、妙な感傷にとらはれてゐ
るのだらう。英助は死にたくはなかつた。いまごろになつて死ぬのならば、も
う、何年か前に、すでに死んでゐる筈だ。誰に尋ねやうもない、空漠としたた
ゞよひの中の人生が、もう十年近くもつゞいてゐて、すでにその歳月を今日ま
で耐へて来てゐるのだ。……寝たり起きたりしながら、暇にまかせて過去の事
を考へ続けて今日まで、まるで囚人のやうな暮し方をして来たのだ。——英助
は何時の間にかうとうと眠つてゐた。

窓の硝子戸はすっかり暗くなつてしまつたが、町子はなかなか戻らなかつた。
闇の底に、英助の寢息だけがきこえる。畳に置いてある空のやかんが闇の底に

にぶく光つてゐた。柱鏡にも光がある。部屋の隅隅が不気味に屋根をさへてゐた。英助の臉の上には、何か夢まぼろしが走つてゐるのかもしれない。——埃をいつばいかぶつた一本の脚が、軍靴(ぐんくわ)をはいて旅をしつゞけてゐる。月の皎々とした沙漠の砂の波のなかを、脚だけが飛ぶやうに歩いてゐる。銀色の鉄兜をかぶつた大勢の兵隊がライオンに乗つて、沙漠のなかを横断してゐる。脚は兵隊の大真面目な行軍を見て驚いたのだ。まだ、何処かに戦争がある。突然の衝動で脚は急に笑ひ出した。さうして、もう馬鹿々々しくて歩くことをやめた。石穴にもぐりこんで、月光をさへぎる為に鎧戸を閉ぢて脚は横になつた。遠くの方で、馬のひづめの音がした。兵隊の呻く声かした。脚はその石穴でぐつすりと眠つた。朝、眼が覚めた時には、脚のまはりには蛆(うじ)が巢をつくり、身動きもならないほどの骨や腐肉が石穴につまつてゐた。鎧戸から降りそぐ朝の光りは水の流れになつてびちやびちやと石穴の中に溢れて来る。

英助は眼を覚した。樋をつたふ雨の音がしてゐる。英助はむつくりと起きあがつた。自分の喉首が鳴る。畳に這ひ出すと、濡れた畳は氷のやうに冷たかつた。町子は帰つて来ないのではないかと不安になつて来る。英助は壁づたひに立ちあがると、電気をつけた。急に四圍が針のやうな光線でちりばめられる。英助は独りである事に耐へられなかつた。外套を引きずり出して着込むと、這ふやうにして玄関の松葉杖を両脇にかいこんで硝子戸を開けてみた。光つた氷雨が降つてゐた。檜葉の垣根の匂ひが鼻をつく。英助は戸外へ出てみた。路地の出口で二人連れの女に出逢つたきりで、誰も通る者がない。電車の踏切を越して、暗い濡れた道を、英助は飛ぶやうに歩いた。まるで、亡霊が歩いてゐるやうだと思つた。滾々(こんこん)として果てのない生命への執着が一本の脚の裏に響いて来る。とにかく孤独ではゐられないのだ。青いシグナルが坂道の下側に近づいて来る。英助は濡れた外套の襟をたてた。電車の駅まではまだ相当だつた。賑やかな町通りまで来た時には、英助は疲れきつてゐた。腹が空いてゐるせゐか、ひどく怒りつぽくなつてゐたし、何よりも、氷雨の風の冷たさにやりきれなくなつてゐる。駅へ来ると、まだ電車は来てゐなかつた。英助は駅の前の交番に這入つて、若い巡査に暫く休ませてくれと頼んでみた。小柄な巡査はピストルを肩にかけた物々しい姿で、英助に椅子をすゝめてくれた。交番から、駅のなかは一見に見える。「冷えますなア……」人の好きさうな巡査は英助へ話しかけて来た。「脚はどうされたンですか？」英助はあゝまたかと笑ひながら、「日華事變の時の負傷です」と云つた。「ほう、それは大変でしたねえ。御不自由ですね」英助は「えゝ」とあいまいに答へた。「私もスマトラの方へ行つてゐまして、終戦までをりました」若い巡査は刻み煙草を出して、露店ものゝシンチュウの煙管(きせる)を卓子(テーブル)のひき出しから二本出

して、英助にも一服どうかとすゝめた。英助は一服煙草を貰つて吸つた。悪い油とみえて、ライターの火が黒く糸を引いて巡査の狭い額に立ちのぼる。炎のなかに、煙管をつゝこんで英助は煙草の煙を深く吸つた。「このごろは、此辺もぶつさうになりましたね?」「ええだいで被害が多くなりましたよ。——盗まれる方だつて悪いンですよ。こんな世相では、盗(と)る方だつて、一つや二つの理由はありますからね。——だけど、私は人を信じてゐます。つかまへてみれば、別に、極悪人と云ふものはゐません……」英助は驚いたやうな顔で、若い巡査を見た。髪をチツクで綺麗になでつけてゐた。言葉に四国訛りがあり、よく見ると、人なつゝこい少年のやうな表情をしてゐる。「巡査になられてからお古いのですか?」「いや、まだ一年です。田舎でぶらぶらしてゐても面白くないものですから……」雨は小降りになつた。時々水つぼい風が吹きこんで来る。「いまの若い人間は本当は可哀想なンですよ。長い間、何一ついゝ事もなく犠牲にばかりなつてゐたンですからね。自分も復員の兵隊ですが、あんまり妙な世の中なので、腹を立てゝ巡査を志望したンですがね、罪を犯す奴と云ふものは際限もなくゐるもンですなア」英助は二服目の煙草を貰つて吸つた。火の気のない交番のなかは、コンクリートの匂ひだけが強い。「私は共産党ぢやアないンですが、どうですかねえ……終戦と同時に、いまの陛下が御退位なすつて、皇太子殿下が天皇になつておいでだつたら、世の中はもつとばあつと童話的に明るいのぢやないかと思ひますがね。四十代の時代は去つたのですから、一つ若い世代から始つて行つてをれば、かうも、世の中は荒(す)さまなかつただらうとおくそくしますが、こんなことを云つたりすると、貴方は私を不敬罪か何かでふんづかまへますかね?」巡査は真面目な顔をしてゐた。英助は、「自分はお伽話のやうな、明るい気持だけでも欲しいと思ふもンですから、こんな事を想ふのです」とつけくはへた。轟々と地鳴りをさせて上りの電車がホームへはいつて来た。いまゝで淋しかつた駅の中が急に華(はなや)かになり、十五六人ばかりの人が降りて来た。英助はちいつと眼をこらしてゐたが町子の姿は改札口を出て来なかつた。英助はがっかりした。頭の芯に不安な影が明滅して来る。「傷口は痛みますか?」巡査が尋(た)づねた。「えゝ、かう冷えると駄目です。全く、何も彼も駄目ですなア。無職の徒で、罪人よりもたちが悪いです……」巡査はふつと眼もとに笑ひをふくんで「そんなことはありませんよ。そんな馬鹿な事を考へちやいけません。負傷したと云ふ事だけでそんな考へをされるのはいけないね。何も大した事ではないとは云ひませんよ。でも、思ひやうで、何とか活路を開かン事には、人を頼りにはならないのですから、……」英助は巡査の初々しい几帳面な顔つきが嬉しかつた。「貴方は独身ですか?」「いや、郷里に置いて来ました。何しろ部屋がないものですからね。早く呼んでやりたいと思ふのですが、とても二人では食つて行けさうもないです。今日(こ

んにち)、莫大な権利金を払つて部屋を借りると云ふ余地もありませんから、当分はこのまゝでせう。——ところで、自分一人を置いてくれさうな、安い部屋はありませんかなア……」 巡査が思ひあまつたやうに云つた。「さうですね」 英助はふつと、三畳の玄関の間を思ひ出した。かうした素朴な同居人がある事は愉しいに違ひない。同居人があれば、何も、求めて夫婦がしばしば死ぬる話をする事もないだらうと考へられる。「さうですな、心当たりがないでもありません、考へておきませう……」 巡査は元気づいた表情で、「どの辺にお住ひですか」と聞いた。名前と所番地を教へると、巡査は壁の地図を鉛筆で追ひながら、「あゝこゝですね。一度、非番の日にもでもお尋ねさせていただきます」と云つた。——英助はかうした誇張のない人間が好きであつた。二台目の電車にも町子は乗つてゐなかつた。英助は空腹と寒さで両脚がしびれた。形のない脚までがしびれて来る。英助は思ひ切つて松葉杖にすがつて立ちあがつた。巡査も立ちあがつて、名刺を出しながら、まるで兵隊の時のやうな挙手の礼をした。——ぬかるみの水を弾ねかへして重たい風が吹いてゐる。この分では近々に雪でも降るかもしれない。英助は部屋のないあの巡査の為に、自分の軒を分けてやりたいやうな広々とした気がして来た。まだまだ此世にはいゝ人間がゐる……。しかも、あの巡査は人を信じてゐると云つた。英助は自分の苦痛を隠して、楽天主をよそほひながら、それを得意としてゐた自分に卑しいものを感じた。なさけないやうな気もして来た。何時(いつ)か弟が云つてゐたやうに、古本屋の店番でも始めてみようかとも思つた。

家へ戻ると、玄関の土間に、大きい男物の蝙蝠傘が壁に立てかけてあつた。「何処へ行つてゐたのよツ」 台所をしてゐると見えて、町子の声だけが動いて来る。英助は松葉杖をがらりと置くと、岩のやうに重い、水漬けの靴を両手に力いつばいかけてぬいだ。たつた一つの靴をぼんと土間に放(はふ)つた。蝙蝠傘の柄には野毛と太い文字が彫りこんである。英助は、二ヶ月程前に尋ねて来た野毛と云ふ男を想ひ出した。町子の会社の同僚で、町子の言葉のはじはじによく出て来る働きものの男の名前だつた。「おい、お前さんを迎へに行つたンだよ」 這ひながら部屋にはいると、小さい折たゝみの卓袱台の上に、すき焼の支度が出来てゐた。ぱあつとした肉の色と、緑を混ぜた葱の色が眼に沁みる。「あら、私、さつきの電車で戻つたンだけど、貴方、何処にゐたンのですの？」 手を拭きながら町子が出て来た。何となく酒臭い匂ひがした。「交番の中で待つてゐたンだ。をかしいね」 町子は電気コンロの上にニユームの鍋をのせる。「傘をさしてたから判らなかつたのでせう？」 「もう、十時だぜ、早く戻つて来るつて、どこへ行つてたンだい。こんなに遅く……折角の日曜日の夜を台なしだよ」 心のなかでは憤つてゐながら、英助は外套をぬいで、しびれた腕の両腋を、手のさきでかはるがはる揉んだ。ひどく憤つてゐる顔を伏せて。「壮吉

さんの所へ寄つて、それから上野へはまつて、お金をつくつてね、買物をしてりして遅くなつちまつたのよ……」英助は返事をする元気がないのだ。野毛の蝙蝠傘をどうして借りて来たのだと尋ねたいところだつたけれどもそれも物憂くなつてやめた。このまゝ妻が戻らなければよかつたとさへ思へた。あの巡査とつゝましい生活をして、古本屋の店番に通(か)よつた方がましだとも思へた。夫婦の間の情に厚いと云ふ事は、お互ひに辛い事であり、英助には若い町子に濟まないやうな気さへして来る。自分が孤独になるのを恐れてゐる為に必死になつて、妻に善良な良人をよそほふと云ふ事は、英助にとつていまは無意味な気がして来た。一度も喧嘩をしないで、妻のすべての行動を許してゐると云ふ事は、乞食の生活と少しも変らないのだ。肉が煮えて来た。英助はむさぼるやうに肉を食べた。町子は一向に食慾がないと見えて黙念としてゐる。「おい、どうして食べないんだ？」英助が顔を挙げると、町子は眼にいつぱい涙を溜めて空(くう)をみつめてゐた。「どうしたんだ？」「ううん、どうもしない……」がつがつとむさぼり食つてゐる男の姿を哀れんでゐる涙ともとれる。「壮吉は何してゐた？」町子はふいと台所へ立つて行つた。暫くして、「貴方、うどんをそこへ入れませうか？」と明るい声で町子が云つた。やがて、ゆでたうどんを西洋皿に入れて運んで来た。「何を売つて来たんだ？」町子は人が變つたやうにぱつと眼をかゞやかせて、「何だつていゝぢやアないの……地から湧いたと思へばいゝわ」とあでやかに笑つてゐる。英助は吻(ほつ)として町子の顔を見た。助かつたやうな気がした。こげつく肉の匂ひがさうざうしく耳に来る。妻が世にも貴重な宝物のやうに思へて来るのだ。死ぬとも生きるともまだきまらない感傷が強く英助の胸を突いたけれども、胸の奥の方では生きるると云ふ事が疾(とう)にきまつてゐた。微塵も死ぬ気はない。

「ねえ、若いお巡りをこゝへ置いてやらうと思ふンだが、君はどう思ふ？」食事が済んでから、英助は町子に、人のいゝ巡査の話をしてみた。町子はうかない顔で、食卓を片づけながら、「お巡りなんて厭だわ。こんな猫の額みたいなところへ置いたつてどうにもならないでせう……」と云つた。「だつて、三月には、弟だつて試験を受けに来るンだもの、たちまち困りますよ」「大樹君は大学を受ける気なのかい？」町子の弟が福島から出て来るとなると、巡査を置く事も考へものだけでも、田舎の官吏の息子が、大学を受けたところで、長年月の学資をどうして捻出するのかと案じられて来る。誰も彼もまだ若い男は大学に這入りたがつてゐるのだ。——ひさしを打つ雨の音がしてゐる。町子の弟が来たところで、自分のやうな不具者を姉の良人として尊敬してくれる筈もない。妻の弟を置くよりも、英助は若い人のいゝ巡査を置いてやりたい気持ちがいつぱいだつた。人を信じてゐると云ふ優しい言葉が、英助の心に銘じてゐた。「おい、死ぬのはやめにしたよ……」思ひ出したやうに床に横になつて英

助が云つた。町子は洗濯した毛糸のソックスを電気の下でつくろひながら、「いやに簡単なのね」と平気な顔で笑つてゐる。「死にたくないな……。君もこんな生活には飽きたに違ひない。君は何処へだつて自由に行つていゝぜ。俺は死なない。壮吉の云つてゐた古本屋の店番で充分だ。何とかして働いてみるよ。——長いこと、君に世話になつてしまつたが、今日まで、君に未練があつたんだ。慾と未練と云つてもいゝかな……。このまゝでは、どうにもやりきれんからね」「何がやりきれないの？」町子はぼつてりした、色の悪い唇に毛糸をなめながら英助の方を見た。その眼もとを見てみると、妻を何処まで信じていゝのか英助には解らなくなつて来る。こんな、自分のやうな宿命の夫婦が、この夜の何処かにも幾組かはあるのだと空想してみる。その宿命の夫婦はひつそりと息をひそめて暮してゐる。形のない大きい嘆きの傷が、暗夜にひどい悲音をたててゐる。その嘆きはそのまゝ凍つて古い古い想ひ出に風化してゆく。取戻す事の出来ない夢と化した昔。そしてその宿命の人間どもは、只、黙つて慣らされてゆく。よりどころがないと云ふことに慣らされてゆくのだ。「野毛さんのところに行つたのかい？」英助は口を滑らせた。言はでもの事と思ひながらも、もう言葉が口をついて云つた。「どうして？」町子の眼もとに不安な影がさつと通りすぎた。「傘があるからさ」「あゝ、あれね、十日程前に借りて帰つたまゝなのよ。今日降りさうだつたから差して行つたの……」十日も借りて来てゐる傘を、狭い家にゐる英助が知らない筈はない。英助はむつとして、床の間の本を手にした。平凡と云ふ題字が二重にも三重にもずれて見える。二葉亭四迷と云ふ文字が、四角い口を開けて笑つてゐるやうに動く。歯が一本もない怪物のやうに黒く動く活字。あゝ、またこの女の嘘に屈しなければならぬ。——英助は人を信じてゐると云ふ若い巡査のおもかげが、まるで恋人のやうにいとしくなつたかしかつた。何時もこの嘘にまるめこまれて、よろけてしまふからだ……。女の心はとらへどころがない。こんな世の中になつたのだから、義理も人情もなく、何処へでも行つてくれていゝよと英助は心で思ふのだけれども、口に出して云ひ出す勇気が今日まではなかつたのだ。「あゝ、すっかり疲れちやつた。私、くたくたになつたわ……」町子はまた今夜も、あくびをしながら予防線を張つてゐる。英助はくるりと、電気の方をむいて、「ふん。そんなにくたびれてゐるのなら、あの蝙蝠傘を抱いて寝りやアいゝんだ。俺は毛布一枚あれば沢山だよ。玄関で寝るツ」本を力いっぱい英助は壁にぶつゝけた。力をこめて放つたことが、何年にもない爽快な気持ちだつた。何年にも、こんな乱暴な事をした事はなかつたのだ。手ごたへのあつた壁を見る。町子は呆れて英助をぢいつとみつめてゐた。何か云ひたい事をこらへてゐるやうに唇をきつく噛みしめてゐる。町子は石のやうに眼をつぶつてゐる良人の姿を憎々しげに長い間にらんでゐた。今夜の現実が、砲弾のやうに、いまはつきりと、お互ひの胸の

なかに命中したのだ。

(昭和二十二年十二月十五日)